

知的障害女性に対する化粧プログラムの有効性 —特別支援学校に通う女子生徒への指導を通して— 丸山里奈

I. 問題と目的

近年、心理学の領域において、心理的または身体的、あるいはその双方に問題を抱える人々に対し、化粧を用いた援助方法が研究されるようになった(野澤・沢崎 2006)。臨床場面における化粧の効果が患者の QOL や Well-being との関係で直接検討されるようになったのは、2000 年に入ってからである(野澤ら, 2006)。しかし皮膚炎患者や老年性認知症患者を対象としたものが多く、知的障害女性を対象とした研究は少ない。

ところで、知的障害特別支援学校へ化粧指導を行っている化粧品企業は多い。しかし体験を重視してはいるものの、化粧スキルの定着をねらっていることは少ない。化粧は社会人女性の身だしなみの一つであり、キャリア教育の一つとして考えられているものの、継続的に指導し、スキルの定着をねらうまでにはいたっていない。

そこで本研究の第 1 の目的として、特別支援学校高等部における化粧指導を通して、化粧行動の変容を検討することで知的障害女性への化粧の指導プログラムの有効性を検討する。第 2 の目的として、化粧教室前後における、参加者の家庭における言質の変化と化粧行動の変容の関連性から生活の質の向上を検討する。

II. 方法

1. 参加者

某特別支援学校(知的障害)に通う高等部女子生徒で、将来的に一般就労を目指している生徒を、高等部教諭の協力を得て募った。参加者は A 氏(1 年生)、B 氏(1 年生)、C 氏(2 年生)、D 氏(2 年生)、E 氏(3 年生) の 5 名である。5 人とも化粧習慣はなかった。

2. 手続き

(1)化粧教室の内容

本研究におけるスキンケア・基本化粧の指導は 20XX 年の 9 月に全 4 回行った。1 回の化粧教室の時間は 90 分、学校授業終了後の放課後の時間に行った。化粧教室は筆者と学生スタッフ 4 人の合計 5 人で行った。

第 1 回	化粧水・乳液(スキンケア)
第 2 回	化粧下地・ファンデーション(ベース)
第 3 回	アイシャドウ・チーク・口紅(カラー)
第 4 回	ファッションショー(成果発表)

Table1 化粧教室の内容

(2)教材

化粧指導は、「化粧動画」「化粧テキスト」「化粧の歌」の 3 つの教材を使用して指導すると共に適宜個別指導を取り入れ指導した。

①化粧テキストについて

化粧テキストは、平野・有川(2015) で使用したものを知的障害者向けに改訂した。知的障害がある女性の化粧スキル獲得を促進するために、知的障害特別支援学校で化粧講座を行っている化粧の専門家 H 氏に助言をもらい改良をした。指導項目と下位パーツ分析は、化粧品会社のスタッフ H 氏らが開催した、A 県 B 特別支援学校で行われた、化粧教室の指導の内容を筆者が課題分析した。その後、H 氏に確認をもらい「化粧テキスト 2015」を作成した。

②化粧動画について

化粧テキストをもとに、動画クリエイター J 氏の協力を得て、化粧のドラマと各化粧項目をチャプターにまとめ、DVD を作成した。DVD には地域で活躍中のモデルの L 氏に出演をお願いした。ドラマ、化粧項目は全 10 個のチャプターで作成した。項目は、1)化粧ドラマ前編、2)化粧水、3)乳液、4)化粧下地、5)ファンデーション、6)アイシャドウ、7)チーク、8)口紅、9)化粧ドラ

マ後編, 10)化粧の歌付き動画である。以上の DVD データを i-Pad に移し化粧教室で使用した。

③化粧の歌について

化粧の歌は, F 大学M氏が作曲したものに, 化粧テキストの内容を抽出し, 筆者が課題分析表に沿って歌詞をつけた。歌は, F 大学アカペラサークル所属の学生N氏が歌ったものである。

(3) データ

①スキンケア・化粧スキルの評価

既習内容のスキンケア・化粧スキルを化粧教室の最初に評価した。スキンケア・化粧スキルの変容の評価を行うために, 野村・岩岡・井上 (2007) を参考に作成した「化粧スキル課題分析表」と筆者が作成した「スキンケアスキル課題分析表」を用いて, 評価を行った。課題分析表の項目の達成が 90%以上のものをスキル獲得とした。

②化粧教室前後における化粧行動の変容

化粧教室前後の 10 日間における各化粧品品の使用頻度と化粧をする際の, 使用教材についてスキッタープロット式アンケートを, 保護者に記録をお願いした。なお化粧プログラムにおいて, 家庭における化粧行動の強制はしておらず, あくまでも自主的なスキンケア・化粧行動を調査している。

③化粧教室前後における, 家庭における会話内容の変化

保護者に家庭における, 「身だしなみやおしゃれ」について, 自発的な会話の様子を記録してもらった。同内容の発問のアンケートを, 意識の変化を明らかにするため, 「化粧教室前」と「化粧教室後」に行った。質問内容は「身だしなみやおしゃれについて」参加者の日頃の発言について記述してもらった。

III. 結果

(1)参加者の「スキンケア・化粧スキル」の変容について

A 氏のスキンケア・化粧スキルの変容を Fig1-1, B 氏の変容を Fig1-2, C 氏の変容を Fig1-3, D 氏の変容を Fig1-4, E 氏の変容を

Fig1-5 に示した。

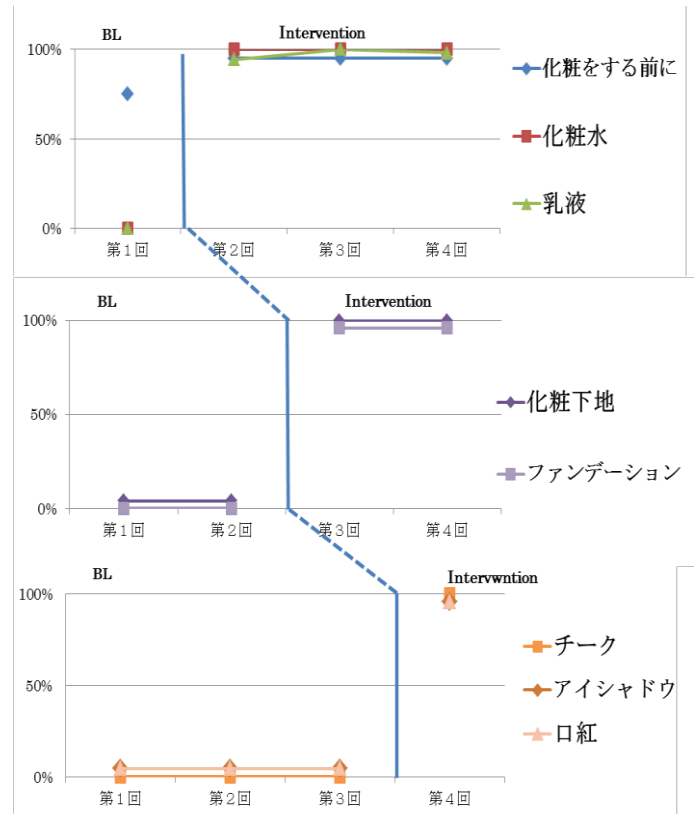


Fig.1-1 A氏のスキンケア・化粧スキル正反応率

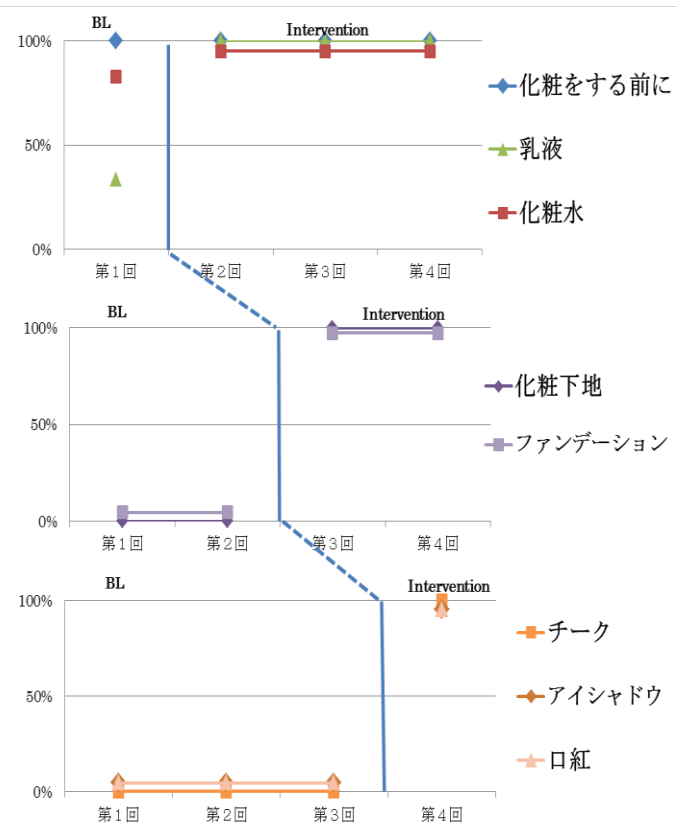


Fig.1-2 B氏のスキンケア・化粧スキルの正反応率

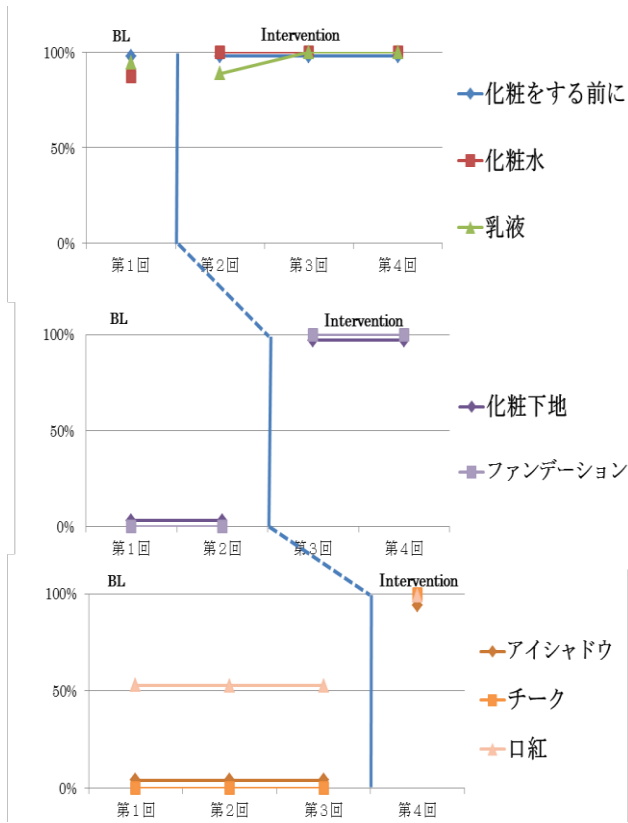


Fig.1-3 C氏のスキンケア・化粧スキルの正反応率

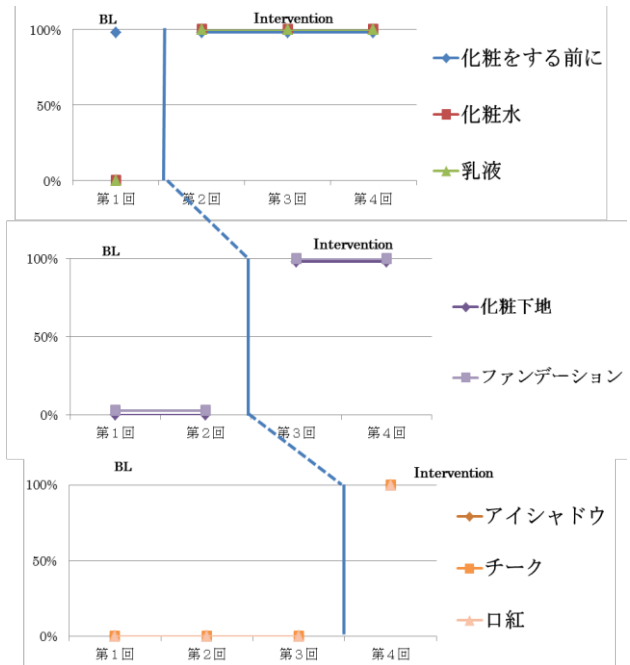


Fig.1-5 E氏のスキンケア・化粧スキルの正反応率

(2) 化粧教室前後 10 日間における化粧行動の実態の変容について

A氏の化粧教室前後 10 日間における化粧行動の実態の変容を Fig2-1, B氏の変容を Fig2-2, C氏の変容を Fig2-3, D氏の変容を Fig2-4, E氏の変容を Fig2-5 に示した。

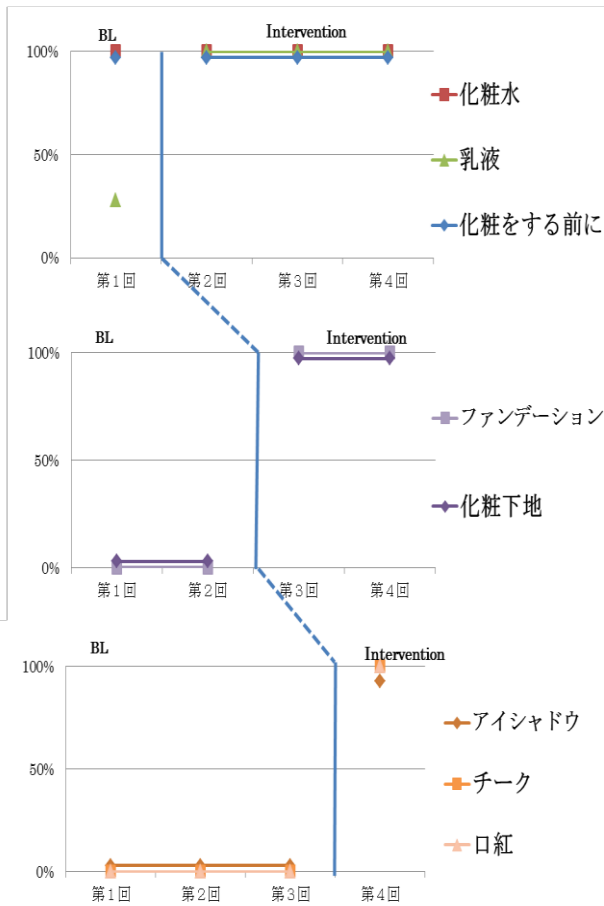


Fig.1-4 D氏のスキンケア・化粧スキルの正反応率

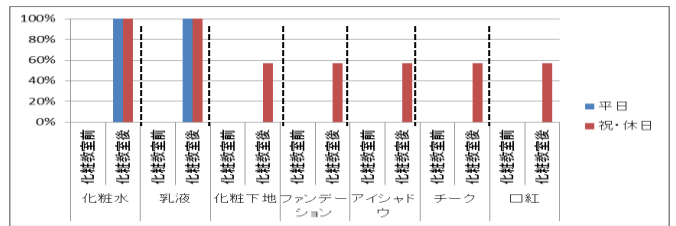


Fig.2-1 A氏の化粧教室前後の化粧品使用実態

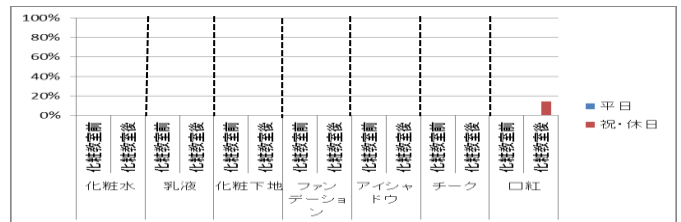


Fig.2-2 B氏の化粧教室前後の化粧品使用実態

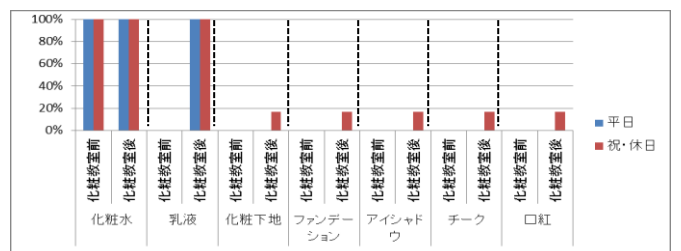


Fig.2-3 C氏の化粧教室前後の化粧品使用実態

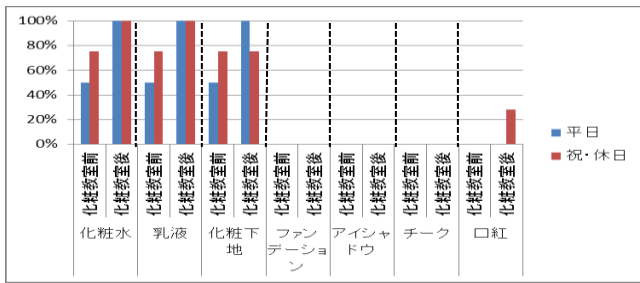


Fig.2-4 D氏の化粧教室前後の化粧品使用実態

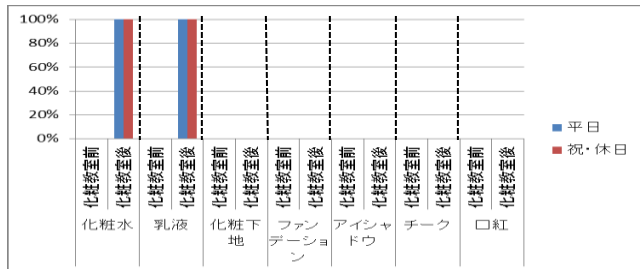


Fig.2-5 E氏の化粧教室前後の化粧品使用実態

(2) 化粧教室前後における、家庭における会話内容の変化

身だしなみやおしゃれについて		
	化粧教室前	化粧教室後
A氏	TVを見ての、衣服への願望	TVを見ての、スキンケア用品や化粧品への願望
B氏	部屋着と外出着の区別がない	記入なし
C氏	通信販売のカタログ、雑誌を見ての、衣服への願望	化粧品購入の依頼
D氏	顔剃り、眉カットの依頼	家族の化粧についての感想
E氏	衣服購入の依頼	記入なし

Table2 化粧教室前後における、家庭における会話内容の変化

IV. 考察

1. 化粧スキル

本研究では、参加者全員が化粧スキル正反応率90%以上となり化粧スキルを獲得した。本研究では知的障害ある生徒のために化粧動画を導入した。テキストだけではわからない動作を、動画によりモデリングすることができ、テキストの役割

を補完することができた。また、第1回教室後のスキル評価の時、C氏、D氏、E氏は化粧動画や化粧の歌を歌っていたが、それ以降は、参加者全員が化粧テキストのみ使用していた。参加者は視覚からの情報であるテキスト、視聴覚からの情報である動画、聴覚からの情報である化粧の歌を自由に選択できた。参加者はそれぞれの嗜好に合った教材を選択できたことが、スキル獲得の効率を高めたと考える。

2. スキンケア・化粧の習慣

参加者は、高校生であり、化粧をして行くことができる場が制限されていた。平日、祝・休日の化粧品の使用実態にもあるように、参加者はスキンケアの習慣は平日、祝・休日を問わず、A氏、C氏、D氏、E氏に定着していた。しかしながら、祝・休日についてはA氏、C氏、D氏の化粧行動が生起していた。スキンケアは、化粧のようにつけていく場所が制限されていないため毎日行うことができ、逆に化粧行動は祝・休日に分強化されたと考えられる。

また、保護者アンケートから、化粧教室後に化粧に関する会話が増えた参加者ほど、化粧教室後の生活習慣において化粧行動が生起していた。このことから、化粧への興味が生活会話の中にも表れており、化粧行動と家庭における会話内容は関連があった。日常生活にスキンケア・化粧行動が増え、会話の量も増えたことから化粧は生活の質の向上に資すると言えるだろう。

V. 引用文献

野澤桂子・沢崎達夫(2006) 化粧による臨床心理効果に関する研究の動向. 目白大学心理学研究, 第2号, 49-63.
 野村和代・岩岡由香里・井上雅彦(2007) 自閉症者における化粧指導(1). 日本特殊教育学会第45回大会発表論文集, 751.
 平野志織・有川宏幸(2015) 障害当事者による他の障害者支援の有効性 - 化粧指導プログラムを通して -. 日本特殊教育学会第53回大会発表論文集, USB.